国際化の潮流

平城遷都一三〇〇年記念事業（上）

宮跡、国営公園として整備
「青丹吉　寧楽乃京師者…」

ジャーナリスト　藤田　康介

二年一カ月後に迫った「平城遷都一三〇〇年記念事業」（以下、記念事業）は、着々と準備が進んでいる。中心舞台となる特別史跡・平城宮跡（世界遺産）は二〇〇七年八月、国土交通省の平成二〇年度予算概算要求に、初めて「国営平城宮跡歴史公園（仮称）の整備」として、盛り込まれた。事業費は未定だが、国営公園全体の要求額三〇〇億円の一部が充てられる。

記念事業は「歴史文化との対話と交流」をテーマに、二〇一〇年一月一日から一二月三一日までの一年間開催。記念事業全体で一五〇〇万人（うち海外一〇〇万人）、平城宮跡事業だけでは五〇〇万人の入場者を見込んでいる（本誌二〇〇六年一一月号で一部既報）。

「日本の歴史文化・美しさ」を国内外に、将来にわたって継続的に示すとともに、より深く理解してもらうため、施設（ハード）とシステム（ソフト）を積極的に整備する――ことを方針としている。

具体的には①国営公園化による平城宮跡の施設復原事業②再現された施設を中心にした平城宮跡事業③奈良県、関西各地をネットワーク化した広域連携事業④二〇一〇年以降の奈良県・関西各地を結ぶ観光周遊システム構築事業――の推進を挙げている。

平城宮跡事業では「再現された施設を中心に、古代衣装・食・音楽などを体験できる場や機会を提供」するとともに、「記念式典はじめ催事・展示・物販・飲食・参加体験などの祝祭フェアを季節リレーで展開」することにしている。

⬆光と灯りのフェア（イメージ画）

春には「大極殿（だいごくでん）完成式典」「花と緑のフェア」、夏は「光と灯りのフェア」、秋は「平城遷都一三〇〇年記念式典」「祝祭フェア」などだ。

広域連携事業では「年間を通じ広域ネットワーク型イベントを開催」する一方、「市町村、社寺・博物館、企業・団体の参加を得て秘宝・秘物などの展示会、伝統行事、国際的コンベンションなどを実施」すると言う。

そのうち、広域ネットワーク事業では「社寺特別拝観」「正倉院特別展」「記念コンサート」など。文化創造・市民参加事業では「平城京パレード」「ゆっくり旅するテーマツアー」「平城京ゆかりの全国の地域と連携したイベント」「最高の生活文化芸術品を創造する奈良クラシクス」など。

国際コンベンション事業では「世界遺産地球会議」「平和のための世界宗教者会議」「世界都城・古都文化会議」などが考えられている。

奈良の都、平城京の誕生から一三〇〇年。今、あらためて〝国のかたち〟が整い、〝国際色豊かな天平文化〟が花開いた奈良時代を思い起こすことは、将来の日本を考えるいい機会にもなろう。素晴らしい記念事業に

⬆文化創造・市民参加事業（イメージ画）

なることを期待したい。

奈良の都は今盛りなり

「始めて都を平城に遷す。左大臣正二位、石上朝臣麻呂を藤原京の留守とす」（現代語訳、以下同）

勅撰史書「続日本紀」の和銅三（七一〇）年三月一〇日条は、こう記す。

青丹吉　寧楽乃京師者　咲花乃
薫如　今盛有

（万葉集第三、太宰少弐　小野老　太宰少弐は太宰府次官の次席の次ぎ）

青い瓦、丹（朱）の柱や白い壁。華やかな平城京は、今の奈良市と奈良県大和郡山市にまたがる地域だ。藤原京（奈良県の明日香村と橿原市）の北二〇㎞に当たる。

都を移したのは、第四三代元明天皇（女帝）。中臣鎌足（後の藤原鎌足）と共に、大化改新を断行した中大兄皇子（後の第三八代天智天皇）の第四皇女だ。

この日、天皇は多くの皇族、貴族、百官を従え、衛兵に守られながら北上した。やがて、堂々たる重層造りの羅城門が現れた。そこから側溝を含め幅約九〇ｍの朱雀大路を進むと、青と丹に彩られた朱雀門と大極殿正殿の甍がそびえ立っていた。

天皇が遷都の詔を発したのは、これより二年前の和銅元年二月一五日。続日本紀は言う。

「遷都は急がなくてもよいと思っている。しかし、貴族、大臣らみなが言う。衆議、無視し難し。平城の地は四禽図にかない、三山（注：春日・奈良・生駒）が鎮護し、亀甲・筮竹の占いもよい。ここに、都城を建設しようではないか」。

「四禽」とは青龍（東）・白虎（西）・朱雀（南）・玄武（北）の四神。「図にかなう」とは、それぞれの方角に流水・大道・沢畔＝沢辺・高山があり、陰陽の吉相を表していることを意味する（「再現日本史」原始・奈良⑧、講談社、二〇〇二年二月一九日号）。

遷都の主計画者は不比等

平城遷都を計画・推進した中心人物は鎌足の子、右大臣、藤原不比等だった。彼はなぜ都を移そうとしたのか―。

一つは藤原京が大和三山（耳成山、畝傍山、天香久山）に囲まれ、狭小な地形だったこと。また、飛鳥川の氾濫に悩まされ、

平城遷都前後の主な出来事

694 年	**藤原京**（橿原市、奈良・明日香村）に都を移す。わが国初の本格的都城。中国・北魏の洛陽城がモデル。第 41 代持統天皇（女帝）の時。それまで天皇は小規模な飛鳥京（明日香村）の飛鳥浄御原宮を親政兼お住まいの場としていた。
701 年	**大宝律令**。　刑部親王・藤原不比等が編纂。律令体制とは 7 世紀後半から 10 世紀半ばまでの支配体制のこと。公地公民を基礎とする中央集権化をいう。大化改新に始まり天智朝の近江令、天武・持統朝の飛鳥浄御原令を経て大宝律令でほぼ完成。
708 年	**和同開珎**。　武蔵国秩父郡（埼玉）が和銅（自然銅）を献上。それで「和同開珎」を製造・使用した。年号も改元。
712 年	**古事記**が完成。第 43 代元明天皇に献上。太安万侶が稗田阿礼の口述をもとに著作した。昭和 54 年、奈良市郊外で安万侶の墓が出土。
720 年	**日本書紀**完成。　わが国初の正史。舎人親王らが第 44 代元正天皇（女帝）に献上。神代から持統天皇までを漢文、編年体で記している。
730 年	光明皇后（第 45 代聖武天皇の后）、皇后宮職に貧しい病人を治療する**施薬院**を設置。
740 年	**恭仁京**（京都府加茂町）に遷都。聖武天皇の時。太宰府の「藤原広嗣の乱」が直接の理由という。
741 年	聖武天皇、詔を発し、「諸国に**国分寺、国分尼寺**建立」を促す。
742 年	**紫香楽京**（滋賀県信楽町）の造営を開始。
744 年	**難波京**に遷都（聖武天皇）
745 年	紫香楽京に都を移す。その後**再び平城京**に都を戻す。聖武帝、5 年の彷徨に終止符。行基、大僧正に。
747 年	**東大寺**で大仏の鋳造開始。
752 年	**東大寺大仏**の開眼供養、盛大に挙行（第 46 代孝謙天皇＝女帝の時）。
759 年	**唐僧・鑑真**、唐招提寺を建立（鑑真の来日は 754 年、6 回目で成功）
760 ～ 770 年	**万葉集**。全 20 巻。5 世紀前半の第 16 代仁徳天皇皇后から第 47 代淳仁天皇（764 年）までの約 350 年間の歌、4,500 余首を収録。編集は大伴家持。
784 年	第 50 代桓武天皇、**長岡京**（向日市、長岡京市など京都府の南部地域）に都を移す。
794 年	**平安京**に遷都

もう全国の人や物を集める場所としては、適さなくなっていたことも。その点、平城の地は藤原京より広大な上、丘を越えれば木津川の水運に恵まれ、物資運搬などには便利だった。疫病の流行もあった。

いま一つは政治的な理由。この時代、日本は大宝律令施行など中央集権体制づくりが本格化し、国家としての形を整えつつあった。それに伴い、官人はじめ人口は急増。役民（民衆）統治上も、首都は華麗な方がよかったのだろう。さらに、不比等としては貴族、豪族の干渉から逃れ、自由な土地で、理想の律令国家を建設したかったのではないか。

まだある。藤原氏の勢力伸長、野心だ。第四二代文武天皇と妃・宮子（不比等の娘）の間に生まれた首皇子（後の第四五代聖武天皇）の即位の舞台を整えること。藤原氏の権力を誇示するには、遷都はその〝最高の機会・舞台〟だったと言えなくもない。

中断はあったものの、平城京は八代・七人の天皇の七四年間、政治の中心地となり、律令制を完成させた。そして、天皇家に最も近い貴族として、藤原氏は権勢を不動のものにしたのだった。

平城京の造営指揮をとったのは、坂上忌寸忍熊（「続日本紀」和銅元年九月二〇日条）。四～五世紀に、大陸から渡来した倭漢氏の一族だ。平城京は唐（中国）の長安（現西安）をモデルにした都城として知られるが、同時に、前の藤原京を踏襲したものでもあった。

面積は長安に比べ、四分の一ながら藤原京の三倍半。南北四・八㎞、東西五・九㎞で、それに東の張り出し部分が加わり、約二一〇〇haあった。南北九条、東西各四坊の大路が碁盤の目のように張りめぐらされ、メインストリートは朱雀大路。

ただ、今年（二〇〇七）六月、大和郡山市教委は「九条大路の南に、〝一〇条大路〟の遺構がみつかった」と発表した。この結果、定説が覆され、今後平城京の京域は南北一〇条、東西各四坊と言われるようになるかもしれない。

朱雀門の奥に、京の中心、平城宮が鎮座していた。天皇のお住居だった内裏、天皇が政務を執ると同時に即位などの大礼も行った大極殿、百官が執務した朝堂院など。役所は八省、五〇機関あった。

もちろん、約五〇に及ぶ寺々の堂塔伽羅も天高くそびえていた。第四五代聖武天皇の創建による東大寺。

また、藤原氏の氏寺・興福寺。前身は飛鳥寺だった元興寺。第四〇代天武天皇（大海人皇子）の建立で、藤原京から引っ越してきた薬師寺。唐僧・鑑真により創建された唐招提寺なども。

⬆朱雀門（1998年復原）

人口一〇万人の都市

平城京の人口は、約一〇万人（五万人、二〇万人説も）だった。官人（役人）、衛士、仕丁、百姓などがいた。仕丁の仕事は多岐にわたり、「土木建築」、鉄工や染物手伝いなどの「手工業」、運搬や風呂沸かしなどの「雑使」、裁縫、炊事、洗濯などの「女丁」などがあった。

官人になるには、平城京にあった「大学」か、地方の「国学」を出て、国家試験にパスしなければならない。学校は金がかかるので、豪族の子弟でなければ、官人にはなれなかった。

官人になっても、五位以上と六位以下では待遇に大差があった。年収を今のお金に換算すれば、五位以上は二八〇〇万円以上、六位以下は七〇〇万円以下だった（「日本史図説」、東京書籍、一九九八年二月）。

太政大臣・正一位、藤原仲麻呂の館「田村第」は四町（一万六〇〇〇坪）以上もあった。その広大な敷地に、多くの館とともに東西には楼、南には櫓がそびえていた。右大臣、藤原不比等の邸宅は今の法華寺に受け継がれているが、同寺の旧境内も四町に及ぶ。

下級官人の宅地は平均一二五～六三坪。家は六～七坪ではなかったか、と推測されて

いる。現在のニュータウンの二戸建てに比べ、宅地は同じか数倍広く、家はやや小ぶりといったところ。

発掘された木簡などから、一部京人（みやこびと）の暮らしの一端も分かってきている。下級官人は地方出身者が多かった。大部分は生活が苦しく、給料の前借りやアルバイトをした。東大寺での写経もその一つだった。

官人は「日の出」とともに出勤し、「正午」に退庁した。冬は短く、夏は長いので、一年を平均すると、一日約八時間の勤務になるとか。

役所が終わると、「市」がにぎわった。市には米麦など穀物、野菜・果物、魚貝類、衣料品、家具調度品から陶漆器など日用品まで何でもあった。

貴族、高級官人らの食べ物も分かってきている。白米や玄米を蒸したり、煮たりした飯や粥。塩、未醤（粉末味噌）、酢などの調味料。カツオ、イワシ、アユなどの魚貝類。ワカメ、生蘇（なまそ）（チーズ風の乳製品）なども。食生活は意外にぜいたくだった。

これと対照的に、下級官人、役民の生活は厳しいものだった。玄米を中心とした主食に汁物一椀（わん）、まれに一皿が加えられた。お椀やお皿は塩や糟で味付けされ、海藻類が多かった。

「続日本紀」和銅四（七一一）年九月条は記す。

「このごろ聞く。諸国の役民、造都に疲れ、逃亡する者多し。禁ずといえども止まらず」。また、翌年正月の元明天皇の詔は「諸国の役民、郷に還（かえ）る日、道で飢える。溝に転がっている者少なからず」と。

きらびやかな都城と言われた平城京にも深い光と闇があった。

（以下次号）

⬆元明天皇「古代女帝のすべて　武光誠編」（1991年2月新人物往来社）より

⬆元明天皇奈保山東陵（げんめい　なはやそのひがしのみささぎ）（奈良市奈良阪町）

遣唐使一覧表（再現日本史、講談社）

回数	使節	出発年	帰国年	備考
1	犬上御田鍬（いぬかみのみたすき）	630	632	唐使・高表仁を伴って渡航
2	吉士長丹（きしのながに）	653	654	往途、第２船が遭難
3	高向玄理（たかむこのくろまろ）	654	655	玄理、唐で病死
4	津守吉祥（つもりのきさ）	659	661	往途、第１船が南海の島に漂着。多数殺される
5	守大石（もりのおおいし）	665	667	唐使・劉徳高を旧百済に送る
6	伊吉博徳（いきのはかとこ）	667	668	唐使・司馬法聡を旧百済に送る
7	河内鯨（かわちのくじら）	669	不明	唐の高句麗平定を慶賀
8	粟田真人（あわたのまひと）	702	704	歌人・山上憶良が同行
9	多治比県守（たじひのあがたもり）	717	718	阿倍仲麻呂・吉備真備・玄肪が同行
10	多治比広成（たじひのひろなり）	733	734	帰途、第４船が行方不明に
11	石上乙麻呂（いそのかみのおとまろ）	746	—	中止
12	藤原清河（ふじわらのきよかわ）	752	753	鑑真来日。第１船は帰途、ベトナムに流される
13	高元度（こうげんど）	759	761	渤海使の帰国に同行
14	仲石伴（なかのいわとも）	761	—	船破損のため中止
15	中臣鷹主（なかとみのたかぬし）	762	—	順風得られず中止
16	小野石根（おののいわね）	777	778	帰途、暴風で石根ら行方不明
17	布施清直（ふせのきよなお）	779	781	唐使・孫興進を送る
18	藤原葛野麻呂（ふじわらのかどのまろ）	804	805	最澄、空海ら帰国
19	藤原常嗣（ふじわらのつねつぐ）	838	839	３回目の試みで成功
20	菅原道真（すがわらのみちざね）	894	—	実施されず